



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

9

子育て支援と

柏女靈峰 著

(淑徳大学社会学部教授)

保育者の役割



子育て支援に対する保育所・保育者の役割がこれまでになく強調されるなかで、保育所・保育者はどのような子育て支援ができるのか、あるいはすべきなのか。この本では、子育ての現状を踏まえ、保育所・保育者が取り組む子育て支援の意義と具体的活動のあり方について、さらに保育士資格の法定化を踏まえた「保育指導」のあり方や課題について考えます。

●保育士資格の法定化によって子育て支援のあり方を学ぶことが努力義務となり、また現場での手引書として、また保育士を目指す学生に必須となった「家族援助論」の教科書としてもご活用ください。

目次

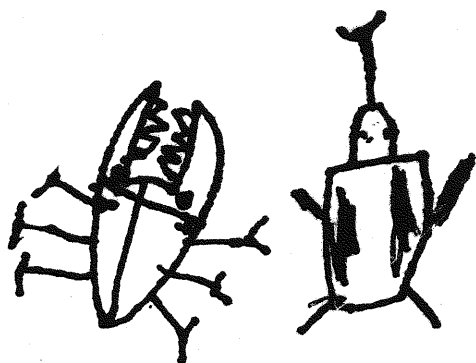
- 第1章 子育ての現状と子育て支援の必要性
- 第2章 子育てニーズと支援の方法
- 第3章 保育所の課題と子育て支援
- 第4章 保育所における子育て支援
- 第5章 保育士資格の法定化と子育て支援
- 第6章 保育所における子育て支援の役割と機能

A5判 176頁 定価：本体1,400円+税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第9号



幼児の教育 目次

— 第一〇二卷 第九号 —

© 2003
日本幼稚園協会

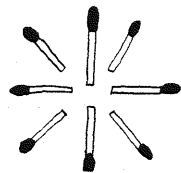
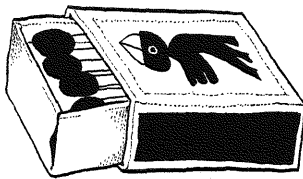
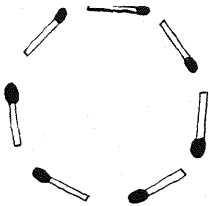
巻頭言 保育評価の功罪……………森上 史朗……………(4)

「遊び」雑感 遊びの演出者は大自然……………吉村真理子……………(9)

生活から自然な学びへ フレネ学校の幼児たち……………猶原 和子……………(16)

子どもと出会う(5) 子どもの時間……………岩田 純一……………(24)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(6) 風車……………浜本 昌宏……………(33)



障碍をもつ幼児の保育(14)―この子と出会ったとき―

目―出会いのときに……………津守 真・津守 房江…(34)

ある日……………(40)

ニューヨークに住む日本のこどもたち

―「NYこどものくに幼稚園」での学び―……………鍋島 恵美…(42)

TO・NI・KARAひろば その九……………嶺村 法子…(52)

自分の保育を振り返って……………堀川 仁美…(59)

表紙絵／南塚 直子

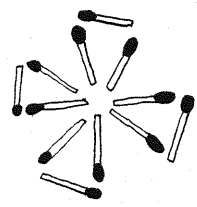
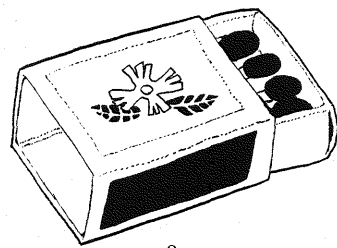
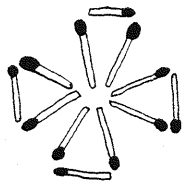
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子

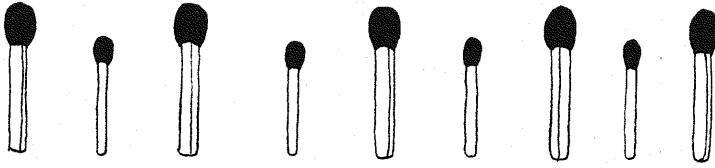


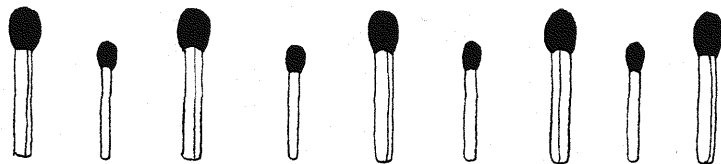
巻頭言

保育評価の功罪

森上 史朗

最近、さまざまな分野で自分たちがやっている仕事がどれほどの成果を生み出しているかの確認（成果責任）と、それがどの程度の成果であるかを外に公表し、納得をうること（説明責任）の必要性が強調されるようになってきています。それが教育や保育の分野にも導入され、保育評価をめぐっての論議が盛んです。しかし、保育の評価は製品の製造や作物の栽培など、他の産業分野と同一ような目にみえる成果、あるいは数量的に示すことのできる成果を求めることは困難で、他の分野の評価をそのままもちこむことには慎重でなくてはならないでしょう。たとえば、製品管理についての国際基準である“ISO”などを保育の評価に導入しようとする動きや、客観的な

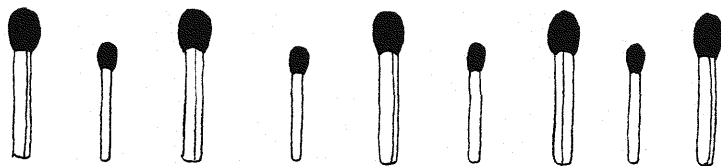




チェックリストを作成しようとする動きなどさまざまな試みがありますが、それには大きな問題があります。

保育の評価というときには、大きく分けて①乳幼児を対象にした評価、②園を対象にした評価、③保育者を対象にした評価の三つをあげることができます。しかし、それらの三つのものはそれぞれ関連し合っていて本来的には分けることが困難なものです。ここでは便宜上分けて考えてみることにします。

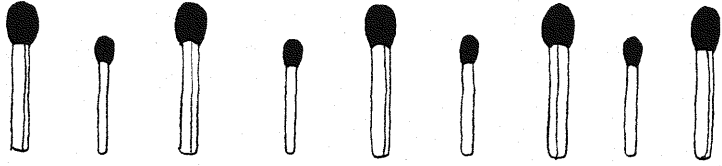
第一に乳幼児を対象とした評価は、幼稚園教育要領や保育所保育指針にも示されており、かなり以前から行われてきたものです。いうまでもなく保育は子どもが望ましい発達をとげるための営みです。したがって、乳幼児が着実に発達の筋道をふみかためているかどうかの確認が必要となります。しかし、そこにはいくつかの問題があります。たとえば望ましい方向への発達といっても、それは子ども観、発達観が違えば全く異なってきます。また、子ども同士のトラブルや葛藤などは発達にとってマイナスと考えられ易いのですが、それは発達に欠かせない体験であることもしばしばあります。さらに、何が「できる」ということを評価するのか、できないけれど「やれたがる」ということを評価するのかが評価はあい反するものになることもあり、さらに最近の発達研究では、一人一人の子どもの能力や個性は、その子どもにのみ帰属するものではなく、保育者との関係や子ども同士の関係の在り方などによって、発見さ



れたり、磨かれることが分かってきています。そうになると、保育者のかかわりを抜きにして、子どもにのみレットルを貼るような評価は適切ではないといわなくてはならないでしょう。

この三月に逝去された高杉自子先生が小学校から幼稚園に転勤されたとき、驚いたことの一つに、幼稚園では「反省と評価」ということばで、必ず自分のかかわりを入れて子どもを評価するということがあったと述べています。そのことに最初は違和感があったが、幼稚園になじんでいくうちに「なんと意味深いことばであるか」と深く納得するようになったことも併せて述べられています。このように評価に際して自分の保育を振り返り、反省するということは後述する自己点検・自己評価の出発点でもあります。

第二に最近では保育の評価ということで、「園の評価」が大きく取り上げられるようになってきています。それは規制緩和やそれぞれの園の独自性が強調される中で、「保育の質」（よい保育）を確保することの必要性からです。保育園については社会福祉法の規定によって外部の第三者機関がそれぞれの園を評価し、公表することになっていきます。一方、幼稚園では設置基準の改正によって、園の保育について自己点検・自己評価を行うことが規定されました。しかし、重要なことは法令で定められたからやるということではなく、本来は自分たちが保育をよりよいものに向上させたい

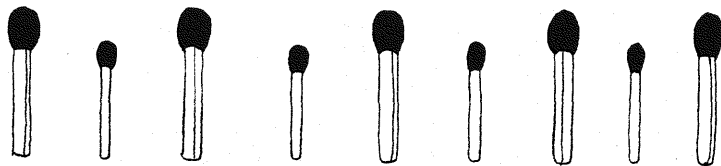


という必要を感じて、主体的に評価に取り組む姿勢がなかったら、それは稔りあるものにはならないでしょう。

評価の方法としては、幼稚園は自己評価が中心で、保育園は第三者評価が中心となつていますが、それぞれには長短があります。すなわち、自己評価はややもすると、ひとりよがりものになりがちであり、それを外に開いて他者の視点も取り入れることが必要となります。一方、第三者評価は評価者によく見てもらおうとすることから、自分の園の保育をありのままに見てもらって、改善への示唆を得ようとする姿勢が希薄になりがちです。そうした点では、まず自己評価から出発し、それを外に開き、保護者や地域の人々も巻きこんだ評価がおこなわれるようにすることによって、園と保護者、地域が一体となった子どもに即した創意ある園づくりが実現可能になるのです。

評価は一般的には成果の評価であると考えられています。しかし、保育の評価はそれとは異なります。なぜなら保育は永遠の追求であり、「これでよい」と思った時には向上は止まるからです。そこで保育者も園も向上し続ける存在であり、その向上するプロセスの評価こそ保育では重視する必要があります。

園の評価の観点や内容としては、子どもへの発達援助、保育環境、保育内容、子育て支援、園の運営・管理、情報提供などさまざまなものがあり、評価者や評価機関に



よって、重点の置き方は異なっています。なかには園の管理システムや保育ニーズへの対応ばかりを重視していて「子どもにとってよりよい保育とは」という視点が希薄なものもあります。

なお、「保育の質」は保育者の資質に大きく依存するところから、最近、保育者の資質、能力を評価する「人事評価制度」が全国各地で取り入れられています。しかし、保育者の資質・能力は、園全体の学び合う雰囲気、園長や主任の指導力、保育者集団の関係性などに依存するところが大きく、個人の責のみにすることには問題があります。

いずれにせよ保育の評価は今後ますます強調されることになることは確実ですが、その在り方によっては、保育を向上させる可能性もあり、逆に保育をこわしてしまう危険性もあります。そうした点で、決められた流れにのるのではなく、保育者からの積極的な提案が必要とされているときではないかと思えます。

(子どもと保育総合研究所)

遊びの演出者は大自然

吉村 真理子

九月の子どもたち

夏休み明けの子どもたちは日焼けして一回り大きくなった姿で登園してくる。やや精悍な表情が保育者の目にまぶしいほどだ。夏休みにどんな体験をしたのだろうか。息せききったように話しか

けてくる子や、視線が合うと恥ずかしそうにっこりして再会の嬉しさをそれとなく伝えてくる子もいる。靴箱やロッカーの側で久しぶりの友達と出会って早速「ぼく、飛行機で北海道のおじいちゃんちへ行ったんだよ」「わたし、おねえちゃんと毎日プールに行って泳げるようになったの。

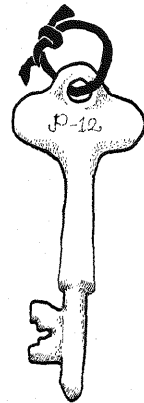
あとでみせてあげるね」「パパとナイター見に行つたんだ。阪神が勝つてパパはごきげん。ほくは巨人に勝つてほしかったのに」と話がはずんでいる。

やがて、しばらく見なかつた保育室内を歩き回つてなじみのものを確認して触つたり、水槽の生き物や小鳥の無事な様子を見て安心したように声をかけていく。園庭に出ると先ず目につくのが植物の変化で「すごい、ひまわりがこんなに背が高くなってる」「きゃー、おばけきゅうりだ、こんなに大きいよ」「見て、朝顔の種ができてる」「でも、お花は小さくなつちやつたね」などと次々に見て回り、夏休み前の様子と比べている。これらの行動は言わば遊びの幕が上がる前の序曲のようなもので、その中には遊びに必要な条件やこれからの遊びの内容や方向を示すように旋律が見え隠れしているように思う。すなわち子ども

自身の成長に伴う興味関心、保育者に見守られている安心感と信頼、友達と再会した喜び、遊び場となる環境の確認など。

各クラスの様子

年長組では室内の風通しのよい場所やテラスに三々五々座りこんでおしゃべりを楽しんでいる姿からは、久々に仲間といつしよにいられる喜びが伝わってくる。しばらく離れていたことがかえって友達とのきずなを強めたのだろうか。お互いに離れていた期間中の情報を交換し合つてそれを共有することで友情を確かめているのかもしれない。やがて、だれかが「サッカーやろうか」と声



をかけると一斉に外に飛び出す。しかし、遊びは長続きしない。まだ外は真夏の暑さが残っているからだ。いつのまにか木陰にしゃがみ、地面に図形を描きながら陣取りゲームをやっている。おや、この遊びは夏前には見られなかったからきっと誰かが持ち込んだものとみえる。

建物の陰の部分ではベンチを左右に分けて並べ、リーダーが問題を出して両方のチームに当てさせている。テレビのクイズ番組の影響であろう。みんな頭をひねって回答を出し、正否にかかわらずその都度笑い声があがっている。

朝顔の種取りをするグループもある。「緑のはまだだめなんだよ。茶色になってカサカサにならないと」「ほら、こんなに種が真っ黒になったら取ってもいいんだよね」と確認しながらカップに入れる。ついでに花がらも摘んでジュースやさんの開店準備をすることも忘れない。

三歳児は暑さと家庭生活の名残りを引きずっている。まだ活発な動きはあまり見られないが、中には久しぶりに母親の干渉から解放されて大はしゃぎする子もいる。しかし大部分の子どもは保育者の側で絵本を読んでもらったりいっしょにまごごとをして過ごしている。そのうち、金魚やうさぎにえさをやりに行ったりしながら普段の調子を取り戻しておしゃべりがはずんでくるが、一か月前と比べると格段に語彙が増えていることに驚かされる。

年中組はといえば男の子が一段とたくましくなり、暑さをものともせず五、六人の群れでエネルギーギッシュに走り回る姿が目立つ。それも仲間と再会した喜びの表現であろうか。群れて行動するにはリーダーの存在が必要だが、きつと夏休みの体験がリーダーの誕生に結び付いたのかもしれない。

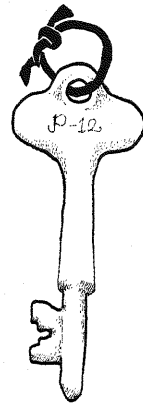
い。だれかの提案に（もしくは指示に）したがって何の遊びかよくわからなくても同じように動いただけで十分たのしそである。これが年長児なら話し合って合意の上で遊びが始められると思うのに、四歳児にはそうした議論はあまり見られない。

もう一つ気づいたのは男女の遊びによる傾向の違いが見え始めたことである。広告紙を丸めた剣、折り紙の手裏剣、画用紙に描いて切り抜いたアニメキャラクターのマスクやベルトなどはほとんど男児専用と言ってよい。ビー玉の場合は男児がゲームに用いて技を磨くのに夢中になるが、女児は形や色を活かしてままごと、お店ごっここの素材として使うことが多い。もちろん、積み木、ねんど、画材、遊具、飼育物への興味などは共通しているの言うまでもない。

気候の果たす効果

園全体の遊びを見回すと、九月の前半は残暑がきびしいので朝早いうちは園庭全体に子どもの姿が見られるが、日が高くなるにつれ陰の部分に移動して比較的静かな遊びが続けられる。唯一、日なたの遊びはプールやタライの水遊びで、それも気温によって暑い日は大勢で賑わうがちよつと涼しくなると人影がまばらになる。こんな日はお湯のシャワーが大人気だ。

月半ばになり涼風が立ち始めると子どももの動きが急に活発になってくる。日の当たっていた園庭の真ん中にも子どもがあふれている。日光が肌に



気持ち良く感じられるようになったのだ。単純な追いかけっこから次第に条件が難しくなる。たかおに「いろいろおに」こおりおに「へと疲れをしらないように遊びが続いている。この遊びの動きは自由だから暑いと思えば日陰で条件に合うところを見つければいい。ただ走り回るだけでなく条件を充たす方法を考え表現力も磨かなければならない。たかおに」の場合、鬼よりも上にいれば坂道でもいいのかなどの意見も出てにぎやかに話し合うこともある。これらの経験はルール成立の意味を理解するのにとても役立ったのではないだろうか。

運動会前の遊びは走ること

近所の小学校の運動会を見て来た子どもたちから「リレー」が持ち込まれると「先生、白い線を描いて」「バトンはないの？」と声があがり、用

意をしてやるといつの間にか子どもたちが集まって、とにかく二列に並んで人数や年齢は関係なくエンドレスのリレーが延々と続いている。保育者は、いつ人数や実力を揃えることに気づくのだろうと興味をもっていたのに一向にその気配はない。よく見ていると入れ替わり立ち替わりやりたいう子どもが何回か走ってまた他の遊びに移っていくのだがリレーそのものはずっと続いているところがおもしろい。時々列の長さが大きく異なっていることがあり、どうしたことかと思議に思っている、走りたくてたまらない子は短い列に、少しくたびれた子は長い方の列に並んでいることに気が付いた。そうすれば休む時間が増えるわけである。リレーといえはすぐにチームの人数を揃え力のバランスを調整し、バトンタッチの方法やラインに沿って走ることを思い浮かべるのは大人の方で、子どもは自分たちの感覚でおおらかに走

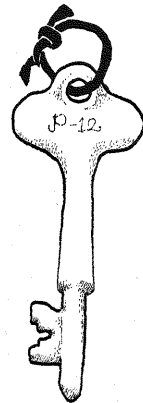
る楽しさを存分に味わうための知恵を働かせている。

なるほど毎年初秋のころに運動会が持たれるのもこうした実態があればこそと改めて実感する。

涼しくてさわやかな季節になると子どもの身体は動きたくてたまらなくなる。仲間意識も育ち、みんなといっしょに行動することを喜ぶと同時に、ルールの理解も進んできた結果、集団でのゲームを楽しみ、グループごとの挑戦意欲も盛んになってきた。この子どもたちが全身で表しているサインを受け止めながらいっしょに運動会のプランをたてていきたい。

秋の自然を満喫する

月末近くなると子どもたちの興味は虫取り、種取りに集中してくる。庭の片隅の草むらでバツタ捜しが始まる。残暑がきびしいうちは控えていた



散歩も、この好季節を大いに活かさなくてはといそいそ出掛けるようになった。子どもたちのお目当ては虫取りでポリ袋と輪ゴムをちゃんとポケットに入れて行く。先週はなかつたのに突然真っ赤な彼岸花が土手に並んでいて「なにこれ？」と驚いたり、出掛ける度に稲の葉が少しづつ黄色味をおび、「なんだかいい匂いがする」と大きく息を吸い込んで目を細める。見上げた空に飛行機雲が幾筋も流れているのを見て「飛行機が絵を描いているみたい」と真っ青な空を見上げ「吸いこまれそうだよ、ぼくも登っていきような気がする」「首が痛くなつたよ」などと話しているのを聞くと、保育内容のテーマはまさに秋という季節だど

実感させられる。

あぜ道に入るとばらばらとバツタが跳び出し、帽子でつかまえようとのおおわらわ。バツタの方が一瞬早くきちきちとあざわらうように逃げて行くのを夢中で追いかけて、やつとつかまえると大事そうにポリ袋に入れる。「あ、でぶつちよのバツタが入るよ」「それ、いなごだよ」「ウルトラマンの目みたいだね」「やだあ、茶色のおしっこしちゃったよ」と大騒ぎしている。こんなに虫取りに熱中するのは太古の狩猟本能が残っているのかと思うほどだ。

散歩から帰ると早速獲物を虫かごや飼育箱に移し、さてどうやって飼うのかと知恵をしばっている。「草を入れてやろうよ」「水は?」「何食べるんだらう」と。しかし、翌朝になると「動いてないのがあるよ、死んじゃったのかな」「もう逃がしてやろうか」と花壇のすみに空けてそれきり忘

れてしまう。そしてまた次の日もポリ袋をもってあきもせず虫取りに出掛けて行く。リレーという形ではなくただ走るのを楽しんだように、生命の尊さ云々よりも夢中で虫を追いかけることの方がはるかに子どもらしく健全だと思う。

園庭の夏の花や野菜は枯れてかさかさ秋風に吹かれ、子どもの興味をつなぎとめているのはかろうじて種だけでフィルム空き容器にせつせと集められる。季節の変わり目がこんなにはつきり感じられるのは他にないのではないか。ここしばらくは運動会ごっこはお休みにして十分に秋を満喫しよう。十月になり運動会が目の前に迫ってきたら今度は競走としてのリレーに闘志を燃やして遊ぶに違いないと楽しみにしている。

(元松山東雲短期大学)

生活から自然な学びへ

フレネ学校の幼児たち

猶原 和子

南フランス、ニースから車で約一時間。山に囲まれたバンスという小さな町にフレネ学校がある。公立学校の教師であったセレスタン・フレネ（一八九六～一九六六）が、従来のフランスの「説明と練習の教育」から「表現と創造の教育」へ転換を図り、実験学校として設立し、今やフランス全土の約十パーセント、世界の二七カ国で実践されているフレ

ネ教育が育まれた場所である。現在は国立学校として、その独自の教育を保障されている。

小高い丘の上、教室が点在し給食室やトイレも別建て。幼児、低学年、高学年の三クラスで異年齢の子どもが一緒に学んでいる。今回は三歳～五歳のミレーユ先生の幼児クラスを中心に、私の記憶を辿りながら子どもたちの姿を紹介したい。

ゆったりとした一日の流れ

学校は幼児から高学年まで週四日、朝九時から午後五時まで、水と土日が休みである。午前中は自由作文の交流と計画表に沿った個人の学習、午後がアトリエ（表現活動）とコンフェランス（自主研究の発表・金曜日は全員での協同組合の話し合い）。大きく四つの活動時間にわかれる。

朝八時半、子どもたちが保護者とともに次々と登校してくる。ミレーユのクラスでは、まず黒板に書かれた二十種類の『計画表』に、今日何をするかを一人一人が自分のマークで書き入れる。

その後九時までは、保護者も子どものそばで自由作文を手伝ったり、先生と親しく話したり、のんびり柔らかなスタートである。

▼表1 黒板の計画表

えのく	デッサン	書く	大工	砂場	計算	本	印刷	ダンス	手紙
		自分のマークを 書いていく							

これの他に個人用の評価表がある。毎日、ミレーユ先生が一人ずつ呼んで、今日は何と何をしたかをマークしていく。月曜日は青・火曜日は黄色というように色分けして、2週間で一枚。それには、先生からの評価や、保護者からのメッセージが書いてある。『フレネ教育研究会報』No.34より けやの森学園の池田彰子氏のメモ)

朝の会の自由な表現

やがて凹型のソファコーナーにみんな集まる。

「今日は何日、何曜日」と暦で確認したあと、給食の人数を係の子が調べに出かける。自分たちだけでなく、上級生のクラスも確認して報告する。学校を運営するひとしごとを幼児クラスも請け負っているのである。

その後は自分の経験したこと、発見したことなどを発表したい子がでてくる。

「きのう、お父さんが退院したの」

「どうしてなの」「くもにさされたの?」

「はじめて入院したの?」「アレルギーは」

次々ととびだす質問に、その子が答えていく。

またある子は、カーニバルに向けての衣装を見せる。「私は人魚になります」「かわいい」。遊び道具やお気に入りを持ち込む子もいる。



▲「朝は ゆったりと」(大森清美氏が2003年3月に写す)



▲「朝の会 対話から自由作文へ」（寺村久美子氏が2003年に写す）

そこでの対話から活動が膨らむ場面もある。一時間近く朝の会は続くのだが、子どもたちは互いの話をよく聴く。ささやく声は発表に関連したもので邪魔にならない。

子どもの語る生活は、先生が簡単な文章にして書いてあげる。文字学習の出発点がここにある。自分の語ったことばが文字になる喜びは次への意欲を促す。子どもは書いてもらった文字を読んでいるかのごとくに友達に語り、家族に語る。教室には毎日語られる生活が絵と文で教室に飾られている。やがて内容を知っている年長の子の作文から必要なことばを探しだし、書いてみようとする行為も現れてくる。自分のための自分のことばとして、子どもは文字を覚えていくのである。

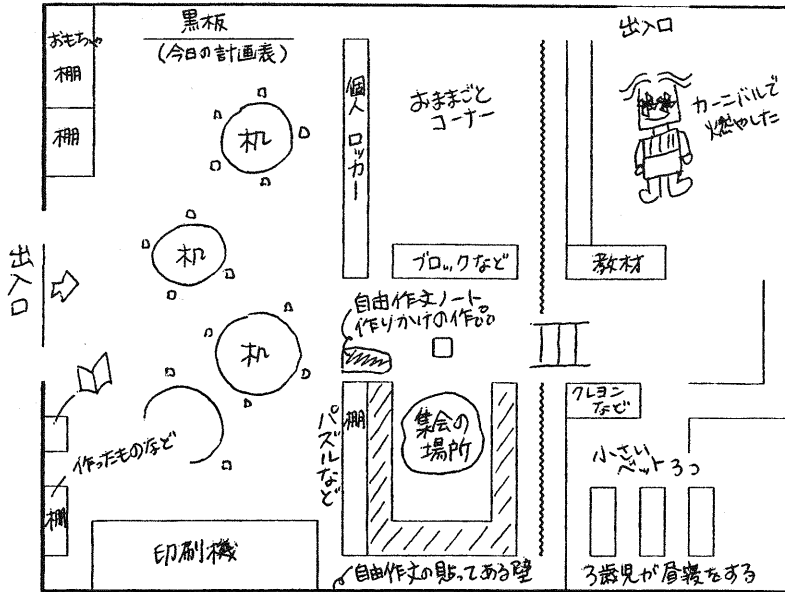
朝の会後は自由な活動。計画表に表した活動をそれぞれが始める。人形劇、粘土、自由作文の印刷（文字を見て活字を拾い、印刷する。三歳児は

先生が活字を並べる) など。大声を出す子はいない。いきいきと自分の選んだしごと(遊び)に向かっている。

散歩にでかけることも多い。自然の多く残る敷地で自由に遊ぶ。危ないところは五歳児が教えている。虫や草花を見つげのぞきこんだり、新しい遊びを思いついたり。五感を通じた体験は、教室に戻って絵や粘土、ことばで表現されていく。

自分のペースで静かに活動を進めているうちに昼食を知らせる音が聞こえてくる。年長が年少さんと手をつなぎ、ランチルームへいざ出発。

食事が終わると、休憩。三歳児は午睡もできるような環境が整っている。眠らない子は絵を描いたり、自分の活動を続ける。



▲幼稚園クラスの部屋を上から見ると—— (池田彰子氏のメモ)

協同組合の話し合い

午後の活動で、私が興味を持ったのは週一回行われる協同組合の会議である。フレネ学校では鶏を飼って卵を売ったり、自分たちの自由作文集を印刷して売ったりと、子ども自らが活動資金を稼ぎ、帳簿をつけ、自分たちに必要なものを購入している。

学校協同組合は、自分たちが気持ちよく生活するために必要な自治的活動を営んでいる。

週一回の会議には年少から高学年まで子どもたち全員が集う。天気の良い日は、外の演劇も出来る丸い広場に集まる。提案や報告だけでなく、問題行動も取り上げられ、みんなで話し合いが進む。

私が参観したときには高学年の男の子が木登りの時に邪魔して、意地悪するという訴えについて話し合っていた。不快な思いをした子たちからは次々と事実が述べられる。「降りられなくなった」「怖がらせ

た」。幼児クラスの子も嫌だったことを堂々と話し、それに対する弁明を求めていた。弁明が認められない時には、まずやった本人が解決策を提案し、話し合われる。教師はみんなと一緒に話を聴き、方向がずれそうな時だけ発言する。今回は協議の結果、「二週間木登り禁止。その後彼の行動が変化したかをもう一度話し合う」ことに決まった。彼はそれを了承し、意地悪をしたことを謝っていた。

印象的だったのは、教師がその子を罰するのでなく、子どもたち同士が学校という社会の一員として、いちばんよい道を話し合うという姿である。レッテルを張るのでなく、問題は当然のこととして話し合う。同じように人を助けたり、よかつたことは仲間から賞賛される。そのような自治的な活動に三歳から加わっているということに私は驚かされた。

もちろん、教室内でのものめごとも起きる。小学生は壁の「私は賞賛する※提案する※批判する」とい

うコーナーに意見を書き、まとめて組合の会議やクラスでの話し合いで解決していく。幼児クラスでは、できるだけその日のうちに話し合われる。帰りの会では様々な一日の生活の発見だけでなく、事件やトラブルも話題になり、話し合われていた。

フレネの子ども観

日本ではフレネ教育を自由放任ととらえる人がいるが、決して自由主義教育ではなく「見守り方式」の教育である。フレネは、子どもの内的自然（潜在的可能性）を尊重し、その感情に合った表現を獲得させていくこと。また、子どもを「未来の自立した市民」と捉え、総合的教育活動を通して市民的資質の形成を目指すことを掲げている。

瓦林亜希子の文章を引用したい。

「フレネは『生活とは本質的に動的なもの、ダイ



▲「様々な学習材(子どもの作品から生まれた教材も多い)」(大森清美氏が写す)

ナミックなもの、環境により、子どもにより、教育者により変わるものである』と述べている。子ども一人ひとりの思考や感情、欲求といった内的自然を尊重し、他者の持つ内的自然との関係性の中でぶつかり合いながら、自己を成長させていくのである。子どもの『生活』が中核にあり、その周辺に様々な形式、内容を持った学習活動が組織されているのがフレネ教育だと言える。全ての活動は、個が個であるとともに、個の共有化が図られるための営みである」。

生活から自然な学びへ

私がフレネ学校で一番驚いたのは、一人ひとりが意識を持ち、静かに活動している姿であった。また、二週間ごとに自分の学びの履歴を振り返り、友達や教師、保護者とともに評価していく姿も印象深い。話し合いの中で評価を訂正し、次への計画をた

てる。このような自立的な学習の原点が幼児期にあるのは間違いない。個々の学びを触発する環境づくり、欲求に対応できる数多くの学習材（BT）。手仕事やアトリエ活動の重視。保護者との密接な連携。

「ハイハイ」と騒々しい日本の学校教育を問い直し、幼児期の「生活」から「自然な学び」への道筋を改めて問い直したいと思う。

（お茶の水女子大学附属小学校）

参考・引用文献

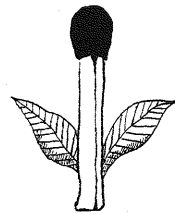
『フレネ教育研究会報』No.34

同右 No.55、瓦林亜希子「フレネ教育法における子ども

観」二〇〇〇年七月

子どもの時間

岩田 純一



以前(一〇二号三卷)に「根にもつということ」でボヴィネリの研究を紹介したが、四歳の頃になると時間的な拡がりのなかで現在の自己の状態を、過去の自己の出来事と因果的に繋げ・関連づけて捉えられるようになってくる。したがって、この頃になると、過去のエピソードを自伝的な記憶として物語るようになる。もちろん、養育者からの問いかけや誘導・援助によって共同想起的に過去の記

憶を思い出し、それを語ろうとするのは、もつと早く二歳頃からもみられ始める。しかし、子どもが自らの体験を時間・因果的な自伝的記憶として自発的に物語り始めるのは四歳頃になってからである。そのような時間的に繋がった線としての自己認識によって、過ぎ去ったじぶんの出来事を今のじぶんと因果的に関連づけるようになるだけではない。それは同時に、未来にありうるじぶんを想像し、それ

を先取しながら今のじぶんと関連づけて物語ることも可能にさせるように思える。このように連続して継起する自己の時間・空間的なペースブレイクが後先の方向に拡がっていくのである。だからこそ、過去のじぶんの経験エピソードを今に活かすだけでなく、他方においては「こうあってほしい」「こうありたい」「あのようになきたら」と、じぶんの希望を物語り、それにしながら現在のじぶんの行動を計画・調整していきけるようになってくるのである。それは時間的な先のじぶんの状態を考えながら計画を立て、その青写真にしたがって、それが達成されるように自己の行為を調整していくプランニング能力として現れるようになってくるのである。

子どもの希望

子どもは、じぶんの未来を希望としてどのようなのであろうか。その一端をうかがうものとし

て、石川県七尾市の保育所二十一か園において三歳児～五歳児クラスを対象に、七夕行事の際に一斉に行われた調査研究（岩田陽子二〇〇三「子どもの希望について」日本保育学会第五十六回大会発表論文集）がある。それは七夕の笹竹に結ぶ短冊にじぶんの願い事を書くという保育の流れのなかで行われた。そこで、子どもは「おとなになったら、どんな人になりたい」とたずねられ、その願いがかなうように、星の王様あてに書かせたのである。もちろん、文字の書けない子どもは担任の保育者が聞き書きするといった方法をとった。それらをながめると、子どもがさまざまな願い事のイメージをもっていることがうかがえる。

年少児であつても無反応は少なく、じぶんの願い事を答えることができる。しかし、その内容にはやはり年齢による違いが明らかにみられるようである。子どもの願い事は、いくつかのカテゴリーに分

類して内容が分析されているが、特徴的な年齢差がみられた結果に限って述べてみよう。年少児は、「アンパンマンになりたい」「ウルトラマンになりたい」「ドレミちゃんになりたい」といったテレビのアニメや絵本に登場するキャラクターをあげる者が半数以上にもなる。このような反応は、それ以降は年長児から年長児へと急激に減少してくる。とくに年長児には一〇パーセントちよつとしかみられなくなる。それに代わって、大きな変化がみられるのが職業をあげる反応カテゴリーである。それらは「ケーキ屋さん」「お花屋さんになりたい」「警察」「看護婦になりたい」「パイロットになりたい」といった具体的な職業をあげる反応である。ちなみに、年少児はそれが二〇パーセントに満たないが、年中児で四〇パーセント近くになり、年長児にはほぼ六〇パーセントに達していた。ヒーローやヒロインといった架空のキャラクターではなく、身の回り

のより現実の社会的な職業をあこがれとしてあげるようになってくるのである。また、全体的にみると割合としては少なかったが「うができるようになっていたい」「優しい人になりたい」といった技能・能力や性格・容姿へのあこがれを願いとしてあげる反応もやはり年少から年長児にかけて増加していくのがみられる。年少児では四パーセント未満であるが、年中、年長児には九パーセントから一六パーセントへと増えてくるのである。このような結果は、年中から年長児にかけて育つ社会的な現実認識のなかで、明日に向かって生きるじぶんの希望を具体的な職業イメージとして思い描けるようになり、さらに、あこがれる技能・能力の獲得や理想とする性格・容姿などを現実・具体的なじぶんの目標として心にもつようになってくることを示唆するのではないだろうか。

このような結果をみると、年中の四歳頃から、時

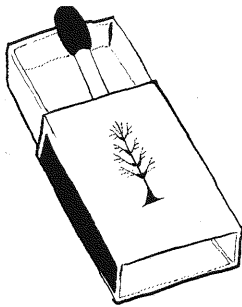
間的な見通しのなかで、じぶんがなりたいたい現実・具体的な未来のイメージ（将来に希望する自己）を思い描くことができるようになってくるのである。そのようなじぶんの希望や期待の語りのなかにこそ、子どもが時間的な見通しをもって行動する、じぶんの行動を計画するといった能力の育ちの一端をうかがうこともできるのではなからうか。

子どもにとつての死

四歳の頃から、時間的に拡張された線として、過去から現在の自己を因果的に繋げて捉えられるようになってくる。それとともに、子どもは今から廻りじぶんの出生に至るまでの過去に関心をもつようになってくる。たとえば家族のアルバムの写真などをみて、過去のじぶんの姿を認め、そのときのじぶんの様子や、じぶんが何をしているのか（出来事）を母親から熱心に聞いたただそうとするようになる。そ

して、その頃のじぶんの出来事を母親から語られるなかで、それらがじぶんの過去の時間として紡がれ、自己の記憶として形づくられていくことになるのである。さらに廻るうちに、アルバムの写真のなかにじぶんだけがまだ存在しない時間があることに気づきはじめる。時間的な廻りの向うに自己がいない未生の時間みしょう的な拡がりがあることに気づくのである。それは、おそらく子どもにとつては奇妙な感覚の体験をもたらすのであろう。

◎お兄ちゃんとお母さんが昔の遊園地での写真をみながらなつかしそうに思い出を話している。ゆうきくん（年中児）がまだ生まれる前の写真である。したがって、そこに

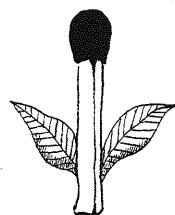


はゆうきくんの姿がない。ゆうきくんは、楽しく話されている写真にじぶんが登場せず、話題から取り残された悔しさから「ぼくも知ってるよ、ぼくはお母さんのおなかの中からみてたもん」と言う。

子どもにとっては、今の家族と一緒にないじぶんの未生の時期があったことは不思議でもあり、理解しにくいことなのである。その証拠に、ある時期には「どうしてほくないの」と、子どもがその不思議を口に出して親に問うことがしばしばみられる。

しかし年中になる頃には、じぶんが生まれる前の時間があることを何となく分かってくるようである。それが、ゆうきくんの「お母さんのおなかからみてたもん」といった表現にもみられるように思われる。このエピソードから、子どもがこの頃には直感的にじぶんの誕生の向こうに拡がる未生の間の時間を感じ始めるのではないかと思われる。

そのようなじぶんの誕生を越えた時間の気づきだけではない。他方において、じぶんの未来を語るのと同時に、そ



のさらに向こうにはじぶんがもはや存在しなくなる時間があることを予感し始めるようである。それは、現在のじぶんの遠い先にじぶんの死を予感し始めるようになってくることである。年中児に入ると、ごっこ遊びのなかでも、生と死という二項対立的な遊びは子どもが関心をもつテーマとなってくる。五歳も近くになると、会話のなかで「死んだら」「死ぬ」といった表現となってもみられるようになってくる。何かのきっかけから、子どもが「じぶんやお父さんお母さんがずーっとすればどうなるの」「ずーっとすると死ぬの」「いつ死ぬの」「死んでからどうなるの」と疑問を口に出して心配そうにたずねることもみられる。もちろん、「生」

や「死」についての生物学的な概念が、子どもとわれわれとは異なることは発達心理学的な研究からも明らかである。そうであるとしても、この頃には、じぶんにとって大切な家族とはずっと一緒にいたわけではないし、またこれからもずっと一緒にいられないといった具体的な脈絡において、「未生」や「死」という自己にとっては闇の時間を直感し始めるのではなからうか。そこには、自分の存在とは無関係な時間の流れ、その流れのなかに点として自己が存在するといった自己認識の萌芽さえうかがえるように思われる。

あるエピソード

ここに五歳の頃にかけてのK児の保育記録から、そのなかのエピソードをながめてみよう。

◎一月頃から、生活の時間に区切りをつけるため、

数字に興味がでてきたK児に、朝起きて日めくりのカレンダーを一枚ずつ破らせ、その日が何日かを教えることにした。

ある日のこと、少なくなってきた日めくりカレンダーをみて、突然に「アアア、七月か！ もうこれだけしかないよ、どうする。もうぼく死んでしまふよ、おじいさんになってしまふ」と心配そうに言う。

同じ日に、遊びにきたYくん「六月はYくんの誕生日だった、そして七月はNくんとSちゃんの誕生日だね、八月はぼくだよ、八月になるとぼく五歳になるんだよ」と、誕生月を比較するように言及する。

◎日めくりのカレンダーが二十五日から滞ったままになっている。Kはそれをみつけて「あつ、カレンダーめくつとらんわ、お母さんきょう何日やつ

た?」、母「きょう遠足行ったんだから金曜日でしょ」、K「あっそうか二十九日か? ほなやぶつとかないかんわ」とかためて破り、「じょうずに破けたわ」「ほんとにもうちよつとになったわ」と言う。母「Kちゃん新しいカレンダーくるからいいよ」、K「いつくるん」、母「このカレンダー終る前にまたくるからいいよ」、K「それでもみんな死ぬんや、ぼくも死ぬんや」、母「ちがう、あたらしいカレンダーくるから死なへん」「Kちゃんなんで死ぬっていうの? なんで?」、K「だって、おはかがいっぱいあるやない、はいらないかんし」、母「あれは死んだ人が入るのよ」、K「そうや、死ぬんや、お母さんもお母さんいっしょに死ぬんやろ」、母「ちがうよ、お母さんのほうがさき死ぬよ」、K「ほな、ぼくどうするの?」、母「Kちゃんは今からおおきくなつてけっこんするんや、ほんでまたKくんの子どもができるんよ、そしたらKくんは死ぬんやで、

K「ほな、それいつ? あしたか?」、母「ちがう、ずつとあとや」(十月)

◎新しいカレンダーをべらべらとめくって、K「これ終わったら、お母さん死んでしまうよ」、父「Kくんはどうなるの?」とたずねると、K「ぼくはまだ死なない、子どもだからつづくから」、父「パパは?」と言うと、K「パパはまだ死なない、べんきょうしないといけないから……」(十二月の末)

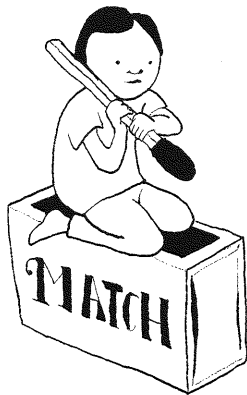
このようなエピソードの出現は、おそらく、この頃にかけてK児にみられた数への興味や関心(計数、数の多少、順序づけ)と平行・関連しているように思われる。1に続き2がやってくる。3は2のあとに起こり、4は3を追ってやってくる。そして2は2の前の1を含み込み、3は2を、4は3を呑み込みながら数字を積み重ねていく。そのような数

は、まさに歴史的時間の拡がりと同様の構造をもっている。したがって、数への理解の深まりは、自己の時間的な拡がりや、生を超えた時間的な拡がりのなかの点としての自己の認識と密接に関連し、繋がっているのではないかと想像される。これは筆者がいただく密かな仮説ではあるが。

これら一連のエピソード記録をながめると、子どもはわれわれのような生物学的な生命観や時間の認識をまだ持ち合わせてはいない。生きる時間が、日めくりカレンダーの残部といった唯物的なものとして捉えられている。しかし落語にみられるように、地獄では命の残りをろうそくの長さで測られているといった比喩的な発想を思えば、子どもをまんざら笑うこともできないだろう。前述のようなエピソードは、子どもが未来の生の向うに、じぶんの存在を超えた時間を予感し始めることをうかがわせる。

われわれは、生が時間の流れのなかにある一瞬の

存在にすぎないことを知っている。じぶんが生を受ける以前から、じぶんのあずかり知らない未生の時間があり、じぶんが死んでも、何事もなかったように未来の時間が流れていくことを知っている。すなわち、自己の生（存在）は、それとは無関係に流れる時間や、無辺の空間を占める点にすぎないことである。未生の過去は歴史として他者から聞くことによつて他者と共有して生きることでもある。しかし、自己の生の向こうに流れる死後の時間は、まさにだれも語らない・語りえない闇であり、だからこそ子どもにとつてさえも死は不安を喚起するこ



とになるのであろう。

わがこころ

四歳の頃になると、子どもは過去の体験を自伝的な記憶として物語れるようになってくる。これは過去から現在にいたって時間的に継起する自己認識の成立である。また時間的な過去に遡及して自己を物語るだけではなく、時間的に順向して未来の自己を物語るようにもなる。このように自己のパースペクティブが時間的な後先へと拡がってくるのである。それによって、過去の出来事を今と関連づけながら考える、先の自己を想定しながら今の行動を考えていくといったことが可能になってくるのである。しかしながら、自己認識の時間的な拡がりはそれにとどまらない。子どもは自己の存在を超えた時間的なパースペクティブがあることにも直感的に気づき始めるようにもなってくる。原初的な形ではあったと

しても、恒久的な時間の流れのなかに自己の存在を位置づけて覚知し始めるのである。

このような自己認識の始まりは、子どもの行動や態度にどのような変化をもたらしていくのであろうか。そのひとつは、他者とは違うじぶんの存在の唯一性を子どもに感じさせていくことになるのではないだろうか。もちろん、そのような自己の存在認識がより根源的な問いとして自覚的な意識にのぼってくるのはもつとあとのことであり、小学校の中学年からの頃であると思われる。それは、「なぜじぶんはじぶんなのか」「なぜじぶんはここにいるのか」「どうしてじぶんはここにうまれてきたのか」「なぜじぶんは他の人間ではないのか」といった、自我体験と名づけられる意識をともなつてあらわれる。しかしながら、そのような意識の原初的な芽生えは、すでにこの四、五歳児の頃においてもみられるのではないかと思われる。

(京都教育大学)

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(6)

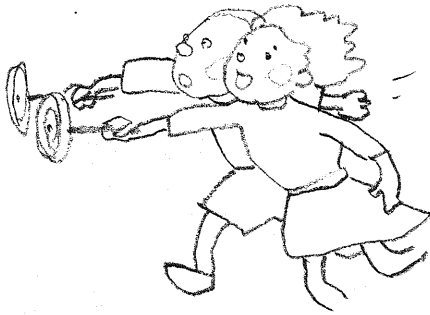
かざぐるま 風車

浜本昌宏

くるくるまわる風車。子どもたちは活動的なことや、うごくものが、大好きです。

さあ、保育者は、子どもたちに風車の見本を示して、自分たちもつくれるよ、と話しかけて見ましょう。

「つくりたい」気持ち
が盛り上がったところ
で、最も基本といえ
る、折り紙の風車をつ
くる手順を示し、順序



を追ってつくります。

教わりながら、ともあれ出来上がりますと、ただちに、吹いてまわしたり、走ってまわしたり、大よろこび。

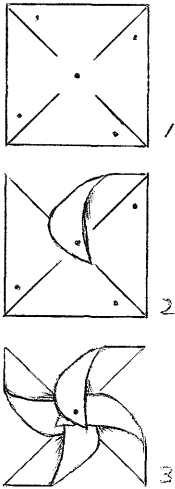
次は、図面と順序に従って、自分の力で再度挑戦。

紙の色を工夫したり、大きさを変えたり、硬い紙を使ったり、模様を描くなどして、変化と発展と創造につなげてみましょう。

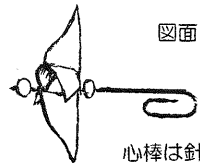
私は、木の枝にいつばいの風車をつけ、一斉にまわして楽しめました。子どもたちも喚声をあげてよろこびました。
(元三重大学)

◀羽根の前後に、ビーズまたは水に浸して柔らかくした大豆をとりつける。割りばしにとりつけて手に持つ。

風車のつくり方



図面



心棒は針金



障害をもつ幼児の保育(14)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

目——出会いのときに

私たちはこのシリーズで、障害をもった幼児と出会ったときどうしたらいいのかを考えてきました。子どもの理解しにくい行動に戸惑って、この子たちに失礼なことをしたり、否定的に捉えたりしやすいのですが、この子たちと一緒に生きられるようにとの願いから、まず足で歩くことについて、次に手を使うことを話してきました。さらに今回は目で見ること、見られること、特に初め

て出会うときのことについて考えてみたいと思います。

見ることは距離が必要

M 最近新しく入学した子が私を見ても、そばに近寄らないで、距離を置いて私をじっと見て、それから口を開いて、にこっと笑ったのがとても印象に残っています。それ以上は近寄って来ないで立って見ているのです。

それで思ったのだけれど、今まで考えてきた足で歩くとか、手を使うとかいうことは直接対象に触れての体験だけれど、目で見ることは直接に触れることはしないで、ある距離が必要だということです。

F 保育中に思索していたのですか。それで……。

M その子は私の方をじっと見て、その日はそれ以上は関わりができなかつたけれどそれは自然のことと感しました。すぐには遊んだりしないけれど、きつと私と遊ぶ日がくるといふ予感を感じながら安心して見ていました。

F それは穏やかな出会いですね。

M 目で見るのは空間的距離だけではなく、時間的にも距離が必要で、何回も会っているうちに、私に対しても心を開くときがくる。これがこの日の保育中の思索なんです。

F ああ、なるほど。

見るために空間的に距離が必要なのは当然だけれど、時間的にも必要なんですね。そのことが分かっていると

安心して待つていられますね。

おとなが焦つてこの場になじませようとしたり、必要以上にか何か提示したりするのは、子どもから見ると不自然かもしれませんね。

M そう、距離があるのは当然なんだから、信頼して穏やかに待つ。大人の方が待てなくなるのですよ。

見ること、見られること

F 子どもによつてはとても恥ずかしがり屋で、なかなか新しい所に入れないことがあります。それはどのように考えたらいいのでしょうか。

M それはその子の繊細な感覚からきているのだから、そのまま受け入れて待つ。

F O 君は来始めたころ、部屋の入り口からそつと中をのぞいて誰も人がいないときを見計らつて入ってくるのです。部屋に入つても初めのうちは一人で壁のほうを向いてボールを投げていました。しばらくすると、私とボールで遊ぶようになりましたけれど、あれも距離を

保っていたのでしょね。

そうそう、二階のバルコニーから庭にいるおとなとボールを投げ合う遊びも、私はずいぶんやりました。そんなに距離をおくと大声が出るのです。

M そうだったね、私とはとても元気に一日中大声を出してよく遊びました。「ひんすけひんすけ」(笑い)という言葉が私と関係をつくるときの合言葉だった。おとなから笑顔と肯定的なまなざしを向けられる中で、いきいきとすることが分かりました。

F どうしてそんなに恥ずかしがるのでしょうか。私が考えるのに見ることよりも、見られることに抵抗があるようなんですが……

M 自分が目で相手を見ることは、見られていることを見ることでもある。見ている大人の目に自分がどのような映るかを見るとき、そこに好意を見たり、ときには心配な親の気持ちや、評価する大人の目を敏感に感じるのでしょね。子どもはそのときの大人の心を見ているのでしょ。

F 別の子どもです

が、電車のおもちゃをずうっと目の前で左右に揺らしている子のことも印象に残っています。電車が好きということも

あるでしょうが、それだけではなく相手のまなざしを避けるという意味もあつたかと、いま気付きました。

M そう、そういう子どもは何人もいましたね。鋭い視線は子どもにとって恐怖でしょう。

頭から上着をかぶっていたり、帽子を深くかぶっていたり、よそからの視線を避けていたいのでしょう。

F それだけ繊細な内面を抱えているのだと理解できま
すね。

目が合わないということ

F 自閉症の子どもは人と目が合わないと言われます



が、このように考えてくるとその理解でいいのだろうか
と思いますかどうでしょう。

M 目が合わないのは、自閉症の症状だと言われること
がありますが、一緒に面白く遊んでいると、じきに目を
合わせるようになることを私は何度も経験しました。目
を合わせることを保育や治療の目標にするのではないん
ですね。その子は私を見たくないから見ないのでしょ
う。私を見ると嬉しくなるといのように私自身がなるの
にはどうしたらいいかと考えるのが保育者ではありません
んか。

F なるほど、そうですね。専門家といわれる人の言う
ことに子どもを当てはめて見てしまう。自分で子どもに
関わって、その子の感じていることを考えることの大切
さをおもいます。

以前、新しく参加した実習生が、とても恥ずかしがり
屋の男の子がなかなか部屋に入れないでいたら、大きな
声で「おはよう」っていつてのぞき込んだのです。もち
ろん男の子を励まそうとしたのですが、背の高い男性の

実習生が立ったまま見下ろすように覗き込んだので子ど
もは驚いて、ほとんど恐怖の表情になりました。私があ
とで「この子どもたちは繊細で、とても恥ずかしがり
屋だから初めての人が、大きな声で声をかけたり近寄っ
たりすると、おびえる子もいる」と話しました。すると
「僕もそうだったからよく分かります。」といつて分
かってくれました。自分の子ども時代のことを忘れない
で、そのことと重ねて理解することは、おとなが子ども
と関わるときに大切なことですね。

でもまた、「この保育にはガイドラインがあります
か」と聞く人もいます。子どもを理解することにはガイ
ドラインは必要でしょうか。

M そう尋ねられれば、私はすぐにガイドラインはあり
ませんと答えます。その子とそのときにかかわっている
のは自分なので、自分で一生懸命に考えてかかわ
るほかないでしょう。けれども、こんな場合もある、あ
んな場合もあるといろんな場合を知っておくと、自分が
考えるのにヒントになることはあるでしょう。それを参

考にして自分の場合に於てはめて考えるところと思わぬ発見をすることもあります。

F 私も実は失敗をしたことがあるのです。

O 君とのことなのですが、なかなか人の体に触れることのなかったO君が私と仲良くなつて初めておんぶをしました。そんなこともあつて私はO君に好かれているという自信のようなものをもっていました。降園するとき泥んこの服を着替えさせると大声を上げるのですが、私はふざけつこのようにしてくすぐったり笑つたりしながらやつていました。そんなやり方がほかの人との間でもやられるようになったとき、離れたところからふと見ると、O君の表情は笑つていないのです。大声も悲鳴のようには聞こえませんでした。

もし私が自分より力の強い人から裸にされて服を着替えさせられたら、どんなにいやだろうと気がつきました。私はとんでもない間違いをしたのではないかと胸が痛くなりました。特別恥ずかしがり屋のO君が裸を見られることにどんな思いだったか。すぐにそのやり方はや

めました。

M そうですね。大人

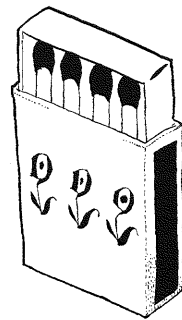
はなにげなく見ているも、見られる子どもには大きな力を加えていることはよくあることです。写真を撮ろうと

すると机の下に潜ってしまう子もいます。もちろん写真を撮られるのを喜ぶ子もいますが、撮る人も撮られる人も、皆が友好的な雰囲気の場合です。場合によっては写真を撮ることは銃口を向けるのと同じ意味をもつこともあります。「見る」ことの二面性ですね。

F なるほどね。思い当たることがあります。

「見る・見られること」についてもう一度

M 見ること、見られることを考えると、能動と受動一般について考えさせられます。触られることに敏感な子、話しかけられることに敏感な子、命令されることに

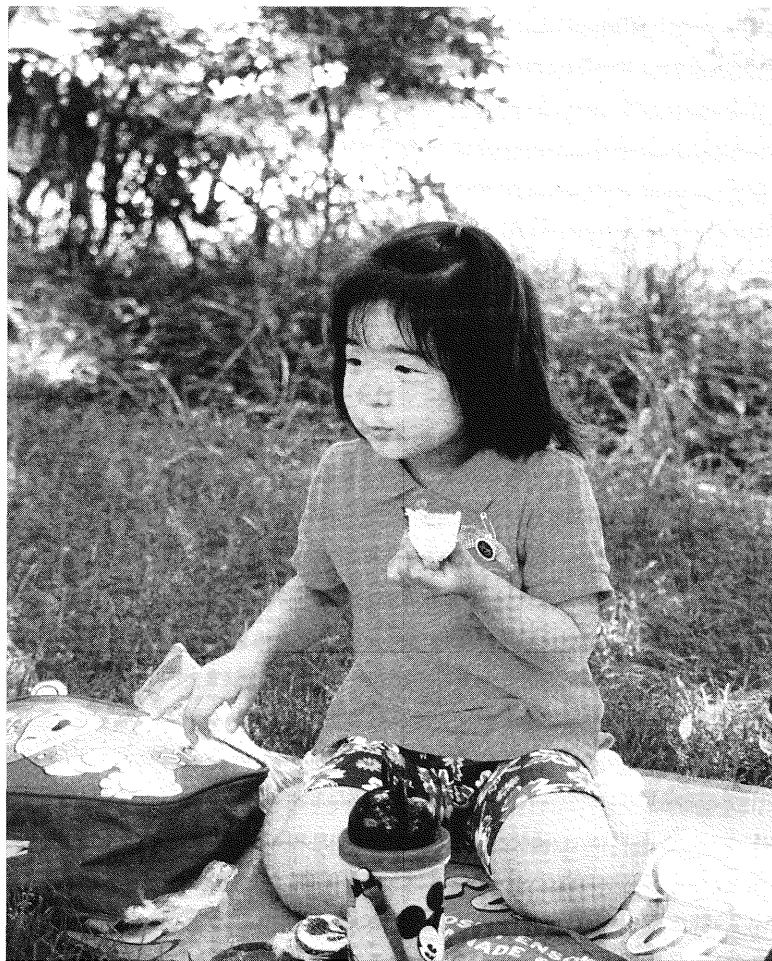


敏感な子など、「られる」ことに敏感な人がいますね。さつきあなたが話した〇くんですが、〇くんが初めて来たときは私も覚えていますが、〇くんが履き替えさせようとすると、大声で泣きわめいて、知らない人が見たら虐待しているのではないかと思われるほどでした。これは身体に触れることに格別に敏感な子だと私たちはすぐに気が付いて、無理して着替えをしないようにした。人からは「しつけ」をしないんですかと言われたけれど、それよりもっと大事なことがあると私は考えた。母親もそれに共感してくれて、そのあと私たちはお互いに楽しく過ごすことをモットーにして、気持ちのよい関係をつくることができました。そのときから二十年たちました。先日も同窓会に来たとき、彼は皆が集まっているところにすぐには入らないで、むかし自分が遊んだ部屋で長い時間過ごしていました。母親が言うには、いつも同窓会ときには何週間も前から楽しみにしていて、作業所の先生たちに、こんな楽しみをもっていて幸せだと言われるとのことでした。彼はどこにいつ

てもジェントルマンだという定評があるそうです。

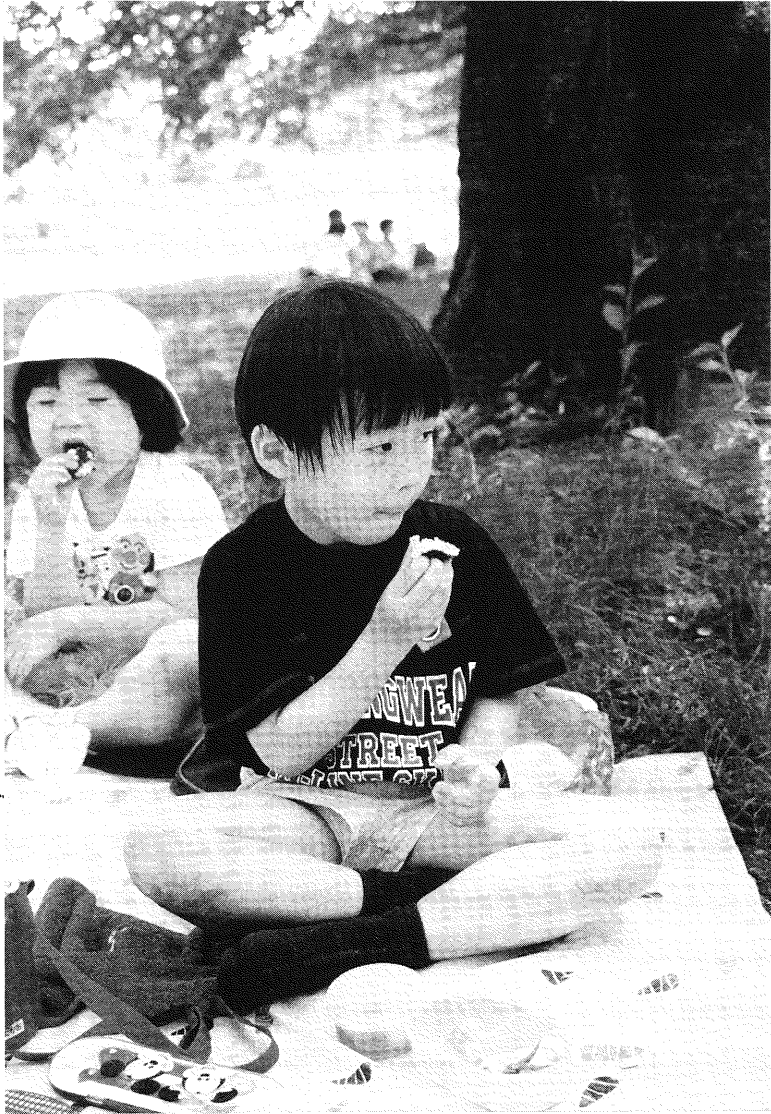
「障害児保育」というと、何か特別の保育の仕方があるかのように聞こえますが、普通の保育と同じだと私共は考えています。敏感な部分はひとりひとり違いますから、ひとりひとりについてそれを発見して、それにふさわしく保育するのです。それはどの子どもについても同じです。「障害児」という実体があるわけではありません。そこで私共は「障碍をもつ子ども」と言います。どこまでも、「子ども」であることは同じだということ強調したいと思います。今日と一緒に快く過ごすこと。そうすると、その子は自分からその先を開いてゆきます。それが保育の根拠だと私共は考えます。

F そうですね。この子を理解するには、愛による想像力が必要なのです。



撮影・平野 清

ある日



ニューヨークに住む日本の子どもたち

—「NY子どものくに幼稚園」での学び—

鍋島 恵美

出会いは一枚の手紙から

二〇〇二年四月から一年間、長く教職に就く私にとって学びの再構築の時を得ることができました。気分は、るるんと希望に満ちていました。「大学院修学休業制度」を利用しての休職です。「NYのこどものくに幼稚園」と私の出会いは、大学の研究室に届いた一枚の「幼稚園教諭募集」の手紙からです。そこには、次のように

書かれていました。

こどものくに幼稚園はニューヨーク郊外にある日本語の幼稚園で、二十五年以上母国語による幼児教育に取り組んできました。日米両文化の恩恵を受けながら先生方も幅広い体験をしていただけだと思います。海外のためなにかと制約の多い条件になりますが、日本での保育と

は違う体験をしていただけだと思います。

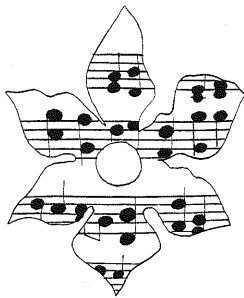
こどものくに幼稚園概要 一九八一年創立、クラス数六クラス、園児数二一〇名(三〜六歳)、職員二十名、ニューヨーク市郊外、ウエストチェスターの高級住宅地の一画にある建物を借用、日本人(殆ど駐在員)の為の幼稚園です。プログラムは、日本での一般的な幼児教育にアメリカの教育法を取り入れています。一クラスあたり二十名(三歳)〜二十四名(六歳)のこども達に担任とアシスタントが二名から三名入っています(一人一人の子どもの育ちをととても大切にしています)。四〜六歳児にはESLクラス、現地校との交流をはじめ、地域社会への参加なども活発に行っています。

幼稚園教諭募集 資格…四年生大卒。幼稚園免許又は保育士免許、担任の経験三年以上、三年任期、要英会話、運転免許

ことばに興味を持つ私にとって、「母国語による幼児

教育」「日米両文化の恩恵」「日本での一般的幼児教育に

アメリカの教育法を取り入れる」「現地校との交流」「地域社会への参加」と、目がランランと輝く用語が並んでいました。そして、ニューヨーク。同時多発テロが起こつて間もない地。「こどもたちはどうしているのだろう」との思い。しかし、私には職業があり、教員募集の対象からはずれます。でも「こどものくに幼稚園」への興味は日に日に募ります。「そうだ！ 就職はできないけれど、研修をさせてもらうことはできるのでないか？」という希望ができました。しかし「要英会話、運転免許」が、次の難関です。家族をはじめ大学院の指導教官や勤務園の上司にその思いを伝えなんとか了解を得て、園長先生宛に私の履歴書と英会話は堪能でないこと運転免許がないことは正直に断



り、それでも熱き思いを綴った願い書をファクスしました。どのような返事か来るのかドキドキでした。しばらくして、次のようなメールが届きました。

とてもうれしいFAXをいただきました。長い間、子どもたちと関わっていらつしやり、そして再度学びの場を得られ、鍋島さんの意欲がひしひしと伝わってきました。とてもうれしのお立場です。私は、一人でも多くの先生方に世界を観てもらいたいと常々思っています。ここニューヨークはアメリカのなかでも、高いレベルの教育が実践されているところです。日本の幼児教育は、アメリカの流れとは違いますが、異文化を肌で学び取ってもらう場としては、多人種、多言語のニューヨークは最高でしょう。よい出会いとなりますよう、祈っております。

私は、面識のない一介の教諭であり、院生である私に

対して、こんな文面を書かれる園長のHさんに大変興味を持ちました。私の希望が現実となることに胸が高鳴りました。と同時に、滞在期間や宿泊所探しへと現実的な話を進めるな一抹の不安もでてきました。

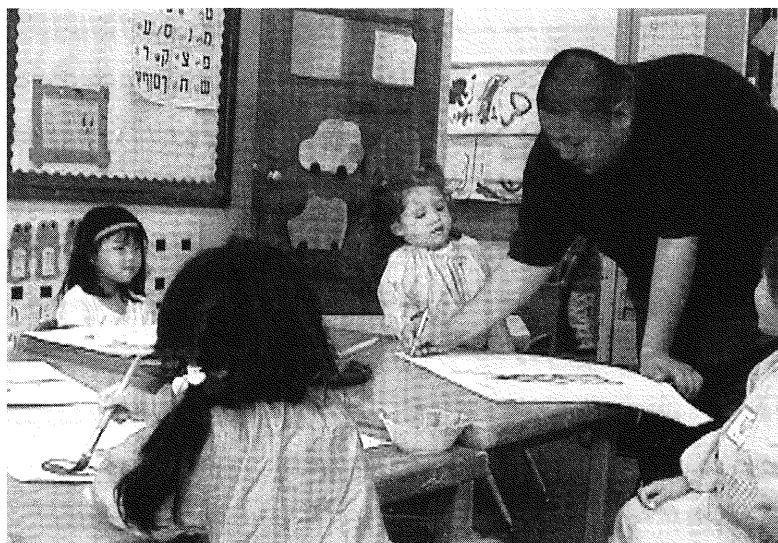
一方、責任感もひしひしと押し寄せてきます。「このものに幼稚園から来てもいいって返事が来た!」と、子どもが喜ぶように伝える私の顔を見て、夫はなんとも言いようのない表情をしました。行くことに賛成はしたもののまさか現実になるとは思っていなかったのかもしれませんが。二男と実母を夫に託して私の「魔女学校 修行の旅」(魔女になって遊んでいたことから勤務園の親子には、一年間の休職をこのように諭えて伝えていました)が始まりました。

魔女学校 修行 春の巻

二〇〇二年四月一六日 NY J F 空港に到着

アメリカは、ご存じのように車社会の国。しかし、

ニューヨーク市郊外ホワイトプレズは、バスやタクシーなどの乗り物が走っています。運転免許のない私にH先生はバスで幼稚園まで通える、おまけに徒歩圏内で買物ができる所に住まいとなるアパートを探してくださいました。こどものくに幼稚園に採用され日本から赴任してきた先生たちは、アメリカ人の家を間借りして生活をしています。身近でアメリカ人の生活を体験してほしいという園の方針からです。英語でのコミュニケーションに堪能でない私には無理とのこと断念して単身生活です。十八日初めてバスに乗り幼稚園に出かけました。初めて乗るバス、緊張が高まります。されど、乗る人や降りる人を注視して真似しながらなんとかバスを降りました。そこから歩くこと十分、高級住宅地の新緑の木立や芝を眺めリスのお出迎えを受け、通り過ぎる車を背に到着。



▲こどもの遊び風景

はい、こどものくに幼稚園です

今までの緊張感が、すーと消えました。「おはようございませう」と、幼稚園に着くなり八名の先生と事務の方から挨拶を受けました。ここは、日本語の世界です。耳を澄ましバス内のアナウンスや、同乗者の言語を聞き取ろうとしていた自分の感覚が日本語を耳にしたとたん解き放たれやすらぎます。「ああそうか！ きつとここに来るこどもや保護者（母親）もみんな同じような安心感があるのだろう」と思えました。早々に登園してこどもたちを保育室に入って待ちました。スクールバスを利用してこども、自家用車で送ってもらうこどもが次々登園してきます。みんな大きなリュックを背負ってきます。担任の先生が、それぞれのクラスにいて登園することも私たちを迎えます。「おはようございます」「お願いします」「はい、お預かりします」と、送ってきた保護者一人一人に声をかけこどものリュックに入った連絡帳に目を通します。帰りのスケジュールやこどもの健康

状態などを把握していきます。こどもは、保育を半日受ける人と一日の人がいるからです。親のニーズやこどもの発達状況からの選択です。個別に対応していきます。

こどものすること、おとなのすること

靴の履き替え、持ち物の始末、ジャケット（衣服）の着脱が、三歳でもひとりで行えるのに驚きです。そのわりに、遊んだ後の机や手洗い用のタオル掛けなど、片付けや遊具・用具の移動は大人にやってもらいます。自分のことは自分でするように大人は手を貸しません。重たいものや大きな物の移動はこどもにはさせません。こどもたちが力を合わせればできそうですが、どうしてでしょう？ ここは、訴訟の国アメリカ、安全管理と関わるのでしょう。また、こどもは守られる存在です。親が、我が子を叱るとき手を挙げたりすると、それを近所の人が見ていると警察に通報され注意を受けて大変なこ

とになります。こどもは社会みんなで守られているよう
です。

幼稚園にも一年に一回は監査が入り、保育者のこども
への保育指導がチェックされます。おとなの学校内での
喫煙は罰せられます。こども専用トイレがあること。大
人はばい菌保有率が高いためにこどものトイレを使用し
てはいけない規則があります。私は来た早々、こどもが
利用するトイレに入ろうとしたとき、「園長先生に叱ら
れます」と、アシスタントから注意を受けました。その
時は、その意味が分からぬままでしたがこのような規則
があることを後で知って納得しました。

こどもから目を離さない態勢も厳しく守られていま
す。園内にあるトイレに行くときもこどもだけではだめ
で必ずおとながついていきます。集団行動で待つとき
は、廊下の壁に背を付けて座って待ちます。この姿勢
は、現地校でも見ました。こどもの安全管理がしやすい
からなのでしょう。日本で見かけない光景が飛び込ん



▲消防署へのお出かけ

できます。安全管理という面から考えると、日本に
こどもの方がもっと緩やかでこどもの園内での行動は自
由度が高いと感じました。

朝はコーヒーを片手に

担任は、八時四十五分頃から保育室にいますが、アシ
スタントは、九時始業にまにあうように保育室にコー
ヒーカップ片手にやってきました。勤務時間が違うので
す。アシスタントの日本人の方はみなさんNY在住の人
で、ここで子育てをしている母親です。こどもの喧嘩へ
の仲裁の仕方が、日本から来たての先生とアシスタント
とは違いがあります。私を含め先生は成り行きを見よう
と待ちますが、アシスタントは、すぐに喧嘩を止め注意
を促します。この違いはどうしてなのでしょう？ 彼
女たちは、現地の教育機関でこどもを育てています。他
人に手を挙げたり、ものを壊したり乱暴な振る舞いは厳
しく学校から親が呼び出され罰せられると言います。彼

女たちは、文化の違いを子育てを通して体験してきてい
るのです。「先生のようにゆったりとは待てないわ」と、
彼女たちは言います。こどもをことばで分かるように注
意します。日本のように、「こどもに喧嘩は付き物。
少々の傷はお互い様」ではすまないのです。しかし、日
本でもこのようなことばは過去のことになりそうです。

日本人の中にいるアメリカ人

アメリカ人のスタッフがアシスタント一名とESLの
先生一名、バスドライバーが二名、厨房に二名います。
一緒に保育するアシスタントW先生は二児の陽気な母親
で「Hi, Emi」と気軽に声をかけてくれます。片言の日
本語がしゃべれます。「Aちゃん、止まってください」
「だめです」等、こどもの安全に必要な行動を制止する
日本語です。きっと彼女が、ここで保育する生活のなか
で覚えたのでしょう。ESLのD先生は、「Good
Morning Emi, How are You?」と、いつも優しく語りか



▲五歳児クラスESLは5、6人が一つのテーブルを囲んで始まる

けてくれる私と同世代。たどたどしいわたしの言葉に「Ahan Ahan」と相づちを打ちながら聞き取ろうとしてくれます。アメリカ人でも気配りの出来る人がいることを発見。D先生のESLの時間はとてもおもしろい。

ESLを受ける子どもたち

五、六人が一つのテーブルを囲んで始まる五歳児クラスESL。こどもは、ふだん遊んでいるときは、日本語なのに、ESLになるとすべて、先生からの質問以外の自分からのことばも英語。それが、自然にでてくるのです。D先生がアメリカ人だからかな? 「BINGO BINGO」と、スペルを歌いながら始まるビンゴゲームはこどもたちが大好きな遊びです。自分の持ちカードが当たると、「me」。カードがほしいと「fix please」とほしい枚数を言い合う。たぶん日本人の先生が教えるところはいかないのではないのでしょうか……。先生の発音を真似るのか「no」や「L」「R」の発音もきれいです。

しかし、四歳児の子どもでは日本語を使ったりわからな
いままに黙っている子どもも多いです。

五月、畑を作ろう

五月、芝生の緑が鮮やかな季節です。私は、芝生に寝
転がって子どもと遊び始めました。でもこちらの先生と
子どもたちは、その芝の上にシートを敷いて座るので
す。なぜ？ 初夏の頃からシカに寄生するダニが発生し
てそれに刺されると、「ライム病」にかかり、命を落と
すこともあるとのこと。だからむやみに芝生にじかに
座ってはダメなのです。こちらの子どもたちは土や泥に
触れて遊ぶことはありません。ご存知のように破傷風と
いう病気があるからです。しかし、子どもの手で育てた
夏野菜を収穫して食する喜びを味わってほしいという願
いから、フィールドの片隅に芝を掘り返し土をいれて畑
作りが始まりました。

畝をつくり、購入したピーマン、ナス、トマト、レタ



▲ランチタイム

ス、トウモロコシの苗を定植し育てることになりました。先生たちは「せっかく育てても野うさぎに食べられてしまふのでは」と心配し、畑作りに消極的です。野うさぎと格闘になるなんてこれは私には味わえない自然です。昼と夜との激しい温度差、日中の日照りの強さ、水やりが難しいと思っていたのは私だけ。初体験の先生たちは、いとも簡単にこどもたちと昼食後に如雨露で水をやります。どうなることかと案じて帰国の途に着いた私ですが、夏に入って、野ウサギにやられることもなく、実がなり収穫できて「おいしい」「おいしい」とこどもたちが食べたとのこと。「来年は、アメリカの野菜に挑戦する」との先生たち。喜びを味わったのは、喜ぶこどもの顔を見た先生たち自身だったようです。食する物を育て成功する喜びは、誰でもどこでも次の意欲を湧き出させる力があるようです。

「NYに住み着くとは思っても寄らなかつた。現地校の片

隅に自分の殻に閉じこもって精一杯立っている一人のこどもとの出会いが、こどものくに幼稚園の始まりなので」と、話されるH先生。現地での子育てのいろんな体験を通して「幼児期には母国語を大切に」と訴えられる。同じ思いをしてこられたF先生と秘書のYさん。子育て中のR先生やアシスタントのみなさん。そして、日本から夢を持って赴任してきた独身の先生たち。「制約の多い中」であっても「さまざまな体験」をこどもたちとともにとおとも共有できるところです。異文化のなかで懸命に楽しく生きているおとなとこどもを感じ「魔女学校 修行 春の巻」を終えました。

(京都教育大学附属幼稚園)

参考文献

『夢をのせていま世界へ』ニューヨークこどものくに幼稚園

創立25周年記念誌、二〇〇一

岡田光世『ニューヨーク日本人教育事情』岩波新書、一九九三

その九

嶺村 法子



中央区の幼稚園では、夏休み中に五日間の夏季保育を実施しています。前半あるいは後半にまとめて五日実施する園もあれば、前半・後半に二三日間ずつ分けて実施する園もあります。内容はプール教室（水遊び）になっていますが、その中にお楽しみの要素を入れ込んでいる園もあります。

私たちの幼稚園では、後半のプール教室の後、“わくわく夏祭り”と名付けたお楽しみの日をつけて実施しています。最初は五日間の内の一日を

当てていたのですが、「プールでの遊びも十分に、夏祭りも思いきり楽しく」という思いから、後半二日間のプールを実施した後に、もう一日夏祭りの日を設けるようになりました。

教頭を始め、私たち一人ひとりがそれぞれ自分のやりたいことを提案し、コーナーを受け持ちます。プールサイドで水着のまま楽しめるよう、「石鹸ボーリング」や「フィンガーペインティング」を企画した年もありましたが、“わくわく夏祭り”をプール教室から独立させて実施するようになってからは、小学校の体育館を借りて行っています。昨年度は、「ペットボトルボーリング」《的あて》《スイカわり》などの他に、お母さん方の有志でコーナーを持ちたいという申し出があり、体育館にビニールプールを持ち込んでの《ドジョウすくい》が実現しました。

自由参加の夏季保育に、毎年かなりの参加があり、特に後半のプールや夏祭りは二学期に向けて

トミカラひろば

のウォーミングアップになっています。私たちに
とつても、子どもたちの夏休み中の成長を感じ、
二期期の生活を思い描くための貴重な時間になっ
ています。

八月二十八日

まっくろに日焼けした子どもたちが
久しぶりのプールにやってきた

滑り台とシャワーを合体した

ウォーターシユート

プールの中で手を広げて待つ私に

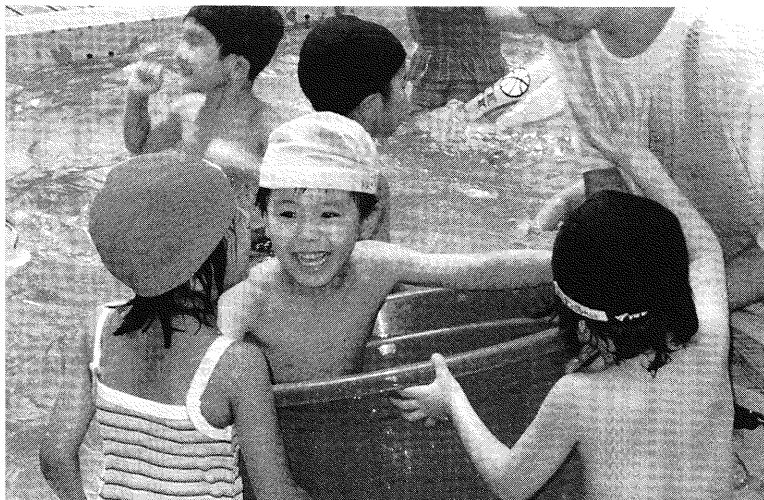
「先生はいなくていいから」

ちいちゃんはそう言う

勢いよく滑って

ザブンとプールに飛び込んだ

大きなタライの船の前にも行列ができる



▲「だれかのって!」「はい! 次はぼくだよ」タライの船は大人気

→→→→→ TOMI KARA U3は ←←←←←

一寸法師よろしくタライに飛び乗ると

すかさず私がぐるぐる回す

いつまでも回るペアもあれば

バランスを崩して

あつという間に

プールの底へと沈んでいくこともある

そのスリルを求めて

なんどもなんども

列に並んでは

歓声をあげて沈んでゆく…

巧技台やフープを使ったトンネルには

色とりどりの水着が次々にくぐっていく

「イルカみたい！」

驚く私に

水中で見開いた目が笑い返す

その横で

水に顔をつけられなかった子が

「見えて」

と頭まで潜ってみせる

一瞬の後

必死の表情が笑顔になる

夏休みが

子どもたちの心身を

たくましく鍛えてくれたことを実感する

プールも終わり

いよいよ“わくわく夏祭り”の日

私はいつもの《あきかんタワー》

空き缶のブルトップを取り

テープを貼って穴をふさいだ空き缶を

大小取り混ぜて用意する

子どもたちは 三人ずつ

いくつ積めるか競い合う

トミカラひろば

「よいい、スタート！」

ストップウオッチ片手に笛を吹く

大きい缶やら小さい缶やら

手当たり次第に積んでいく子

同じ大きさのスチール缶ばかり集めて

慎重に丁寧に積んでいく子

そこへよちよち歩きの弟が

きて

ひとつふたつと積み重ねて

は

にと笑う

高く積んだり横にも並べた

り

いつの間にか見事なオブ

ジェのできあがり

高く高くと積んでいた子が

笛の合図で手を離す



◀「そうつとだよ」見ている方もハラハラドキドキ

ガンガラ ガラガラン

音響抜群の体育館に

空き缶の音が響き渡る

微妙なバランスを保って

見事十一個積んだ子もいる

◆◆◆◆◆ TOMI-KARA ひろば ◆◆◆◆◆

たったこれだけの単純な遊びが

九月の保育室でも大はやり

段ボールのついたてで囲った中に

かごいっぱい空き缶を持ち込み

友達と高さを競い合う

ハデハデしい音と共に

子どもたちの笑い声が響く

「もう一回やろ！」

空き缶を積む

手を離し 数を数えた数秒後

スローモーションビデオを見るように

空き缶タワーがゆつくりと傾き 弧を描く

固唾をのんで見守るその数秒の緊張が

笑い声とともに はじけとぶ

ただそれだけのことが

どうしてこんなにも

子どもたちの心をとらえるのだろうか

そう問いながら

私もまた飽きもせず

毎年この日のために

空き缶を集めていることに

気付かされる

今こうして

問いへの答えを探しながら

ようやく立ち上がることができるようになった子の

積んでは崩す積み木遊びや

中世ヨーロッパの人々の教会建築

最近ブームの中老年の登山にまで

思いは巡り拡散する

高く高く…

人間は高みを目指す中で

自分自身の足元を確かにしていくのだろうか

安全で安心な日常生活があるからこそ

高く高く…と

ト・ミ・カラ ひろば

より不安定な遊びを求めるのだろうか

夏祭りの片隅の

小さなコーナーで繰り返される遊びの中にも

人間や保育について

考える材料が潜んでいる

顔を上げて見回すと

スイカ割りの子どもに

夢中になって声をかける大人たちがいる

口いっぱいにスイカをほおぼり

種の飛ばし方を伝授する

ドジョウのぬるぬるに悪戦苦闘し

ボーリングでストライクをねらい

本気で的当ての球を投じている

大人も子どもも

一緒に楽しむ夏休み最後の日があつて



◀タライに群らがり牛乳パックを手にするりぬると逃げるドジョウと格闘する子どもたち

その余韻の中に

二期期のはじまりの遊びが生まれる

今年の保育学会で、家庭の中から積み木を高く積み遊ぶが消えつつあることや、養成校にも積み木で遊んだことのない学生がいることが話題になった。教材としての遊びは、書物や実技研修からいくらでも学ぶことができるけれども、学んだことを目の前にいる子どもたちと一緒に楽しめるものにするためには、一度私自身の身体をくぐらせることが必要になる。その保育者の身体に、幼い頃の遊びの楽しさが蓄えられていないとしたら……「遊び」は一体何処へ行くのだろうか。

養成校の先生から、自ら現場に出て、ガキ大将になって子どもたちと一緒に遊んだ事例や、学生に積み木で遊ばせる授業を試みた成果が報告されたことを思い出す。たとえ授業の中であれ、ひとつのことに打ち込んで遊ぶ楽しさを経験できた学

生は幸せである。子どもたちの遊びに引き込まれ、夢中になって遊ぶことから、保育者としての一歩は始まるのではないかと思う。

夏の日の一コマの楽しさを描こうとして、思いがけず保育者養成の課題にたどり着いてしまった。保育の現場にも養成校の現場にも、現実の厳しさを受け止めつつ、子どもたちのために心をくだいて働く人のいることが希望である。互いの試みや実践から得た洞察を共有し合うことで、子どもたちとの生活をより豊かにしていけたらと思う。

(中央区立月島第一幼稚園)



自分の保育を振り返って

堀川 仁美

私は、大学を卒業後、都内の私立幼稚園で三年間、持ち上がりでクラス担任を受け持ち、二十一名

の卒園までを見届けた。その後、半年ほど保育の現場を離れていたが、現在の幼稚園で非常勤講師を募集するというお話をいただき、年度の途中から学年付きのフリーとして勤務して、一年半が過ぎた。

保育者としてほんの駆け出しの未熟な私であるが、この場をお借りして、今の自分が、今までの自分の保育を振り返ってみて、フリーという立場で保

育に入っているからこそ気付けたこと、考えられたことなどを、書かせていただこうと思う。

私立幼稚園での一年目は、年少児十六名のクラスの担任になった。もう一つのクラスには、五年目の先輩保育者。そして、ベテランの保育者と一年先輩の保育者が、学年のフリーとしてついた。

その頃の私は、とにかくすべてが初めてなので、隣のクラスの保育者の見よう見まねをするしかな

かった。そして、子どもたちの要求に添えていくことや、喧嘩の仲裁、様々な行事に向けての活動に、子どもたちを誘うことにはかりとらわれていた。先の見通しが持てぬまま、目の前のことに追われる日々だった。

ある時、園長から「自分の得意分野を見つけなさい。隣のクラスの先生が製作や外での遊びが得意なら、あなたはごっこ遊びを盛り上げるといい」というアドバイスを受けても、実際にどうしたらごっこ遊びを広げていけるのか、一体何をしたら盛り上がるのか、実感としてわからずにいた。

そんな私が、それでもなんとか日々保育を進めていくことができたのは、フリーの保育者が、子どもたちの遊びをつなげたり、広げたりする役割を積極的にしてくれたからである。

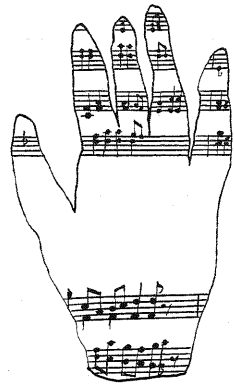
例えば、園庭にあった一人乗り自転車に乗りたいた人が増えると、駐車場や信号機を設定し、単に乗るだけでなく、他の人と順番を交替しやすくしてい

た。車には乗らない人には、信号機の係を任せることで、一つの遊びの流れに乗せていた。

また、保育室にあった『おおかみと七匹のこやぎ』の指人形に興味を示す人がいると、そこからごっこ遊びに展開させたり、『おおかみさん今何時?』という鬼ごっこにつなげていた。

私にとって、子どもたちの遊びのイメージを発展させていくことを目の前の実践を通して学んだのは、これが最初だったと思う。

二年目は、持ち上がって、年少の途中入園の人と、年中からの新入園の人を合わせて、二十三名のクラスを受け持った。もう一つのクラスは、前年度



フリーだった一年先輩の保育者が受け持ち、学年のフリーとしては、新任の保育者が一名ついた。しかし、三人とも経験が浅いので、園長から様々な指導を受けながら、試行錯誤していた。

ただ、一年間なんとか子どもたちと関係を築いていたこともあり、子どもたちへの願いや思いを意識しながら、自分がどう保育を展開していくかという自覚を、少しずつ持てるようになっていったと思う。

三年目もそのまま持ち上がったが、学年のフリーは、年度の途中から、他園で経験のある保育者がつくことになった。

私自身は、子どもたちとの関係が深まったことで、さらに子どもたちへの願いや思いを意識するようにはなった。だが、年長として幼稚園の中で果たすべき役割が大きいことを意識するあまりに、過去に年長児が活動してきた内容を受け継いで、取り組んでいくことに必死になってしまい、行事や、する

べき活動に縛られていたように思う。

日々保育をしていく中で、自分の不甲斐なさや未熟さを実感する度に、「私でない保育者が担任だったら、子どもたちの可能性をもっと広げてあげられたのではないか」「子どもたちが私のことを信頼して、好きでいてくれる以上、できる限りのことをするしかない」と気持ちが揺れていた。

しかし、園長からの叱咤激励や、保護者の方の支え、フリーの保育者の支えがあり、また、若い保育者が多かった為にお互いの悩みを相談し合える環境があったから、三年間、思い残すこともあったが、自分なりにやはり遂げることができたのだと思う。そして、年少から年長までずっとクラスを持ち上げることができたことで、子どもたちが経験したことがどうつながっていくのかを見届けていけたのは、私にとって、とても大きなことだった。

その後、現在の幼稚園の非常勤講師になって、最

初の年度は半年弱。次の年度は一年間、年長のフリーになり、今年度は、年中のフリーになった。以前から研修として公開保育を参観していた保育者のもとで、フリーとして動くことは、とても勉強になる。日々の実践の中で、担任保育者の動きを見たり、保育後の会話などから保育観を学ぶことができ。今までは、経験の豊富な保育者の保育を目の前で見る機会が少なかったので、一から勉強し直している気持ちである。

実感として学んだことの一つを挙げると、ごっこ遊びなどで使うものを作る時に、丁寧に作って大事に使えるようにすることである。家に持ち帰っても、また持ってきて幼稚園で使えるように言葉かけること、子どもの中で、家と幼稚園がつながるのだということを変更して実感した。

また、例えばお店やさんごっこが盛り上がり、そこで使う為に作ったものや材料は、お店やさんごっこが一時停滞しても、クラスの所有物として保存し

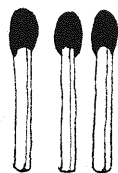
ておく。そうすることで、次に

誰かがお店やさんを始めたいと思った時に再び使えるものがあることで、始めやすくなった

り、最初に始めた人以外でも、誰でもが参加しやすい雰囲気を作ることができる。

年長のフリーに入っていた時は特に、子どもが作りたいものの素材を出す時に、それを出すことによつてどういう広がり期待できるか予想したり、今他の人が展開している遊びとつながっていけるかを考えて出す重要性を学んだ。先の見通しを持つことで、時には子どもがほしいままに出すのではなく、時には子どもがほしいままに出すのではなかったり、違う遊び方を提案する必要もあるのだ、と思った。

今までの私は、一人ひとりが作りたいもの、やりたいことに対応したり、その場その場での遊びを盛り上げることに一生懸命だった。そして、トラブルがあった時に、人と人との関係を援助することばかり



りを考えていた。それも必要なことではあるとは思
うが、もつと長期的な見通しをもって遊びと遊びを
つなげることで、遊びの中で人と人をつなげてい
く、という意識が足りなかった。

今思うと、行事に縛られてはいけないと頭の中
は理解しながら、結局は行事に向けて活動してい
くことばかりに気をとられていた。次にこれをしな
ければいけない、あれを作らなければならぬ、とい
うことで先の見通しを立てていた。

だから、子どもたちから出る遊びが、継続的なも
の、発展性のあるものになりにくかったのだろう。
私が年長の担任だった三学期には、行事やするべき
活動が一通り終わり、子どもたちはそれぞれに落ち
着いて、とてもよく遊んでいた。「もう自分が入る
必要がないのではないか」と思ったくらいだ。だ
が、それは誤解だったのではないか。きっと、私の
関わり方次第で、発展していく遊びや人間関係が
もつとあつたはずだ。

今の私は、フリーとしての経験もまだ浅いので、
担任でいる時とはまた少し違う立場で子どもとどう
関係を築き、どう遊びに関わっていくかを日々模索
している。フリーとしての私の動きが、担任保育者
の保育の妨げになってしまっていないかと不安に
もなる。

しかし、保育後に掃除をしながらなどの少しの時
間でも、その日の保育中であつた出来事や子どもの
様子を話すことで、自分が関わつた場面を担当保育
者につなげることができ、また、担任保育者がこの
後どうしているかと思っているかを聞くことができ
る。この時間が、今の私にとって、とても貴重であ
る。

実際に保育に携わりながら、その保育について具
体的に学んでいける今の環境を大切にし、これから
の自分の保育の実践の中で生かせるように努力して
いきたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

九月はお祭りの季節です。二歳の上の子と昼寝をしていた秋の日、突然に「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声に起こされました。外に出てみると、山車とお神輿と大太鼓が目の前を通り過ぎて行きました。山車を引っ張っているのは、お揃いのはつぴに鉢巻き姿の小さい子どもたちです。その数十人の両脇に付き添いの母親たちがいました。その後について行くと山車はある旧家の庭に入って行きました。

そこは休憩所になっていて、そこにいるすべての子にパンと飲み物が用意されていました。ついて行っただけの私たちにも振る舞われ、私は

驚きました。そして突然、幼い日の一こまが浮かびました。「お嫁さんが来る」と聞き付けると、「おひねりのお菓子」がまかれるのに間に合うように急いで飛んでいった光景です。それは「祝意を表すためにそこにいるみんなに無条件に振る舞われる」ことが子ども心にうれしかった体験です。

(伸)

幼児の教育

第一〇二巻 第九号

(二〇〇三年九月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実技シリーズです

最新刊

0・1・2歳児の
赤ちゃんHOIKU実技シリーズ3

みんななかよし
スキンシップ手あそび・歌あそび

乳幼児と過ごす時間にふさわしい
スキンシップな歌あそびを年齢別に紹介！



乳幼児にとって大切な安心感・安定感を与えるふれあい遊び歌をオリジナル曲、わらべうたの中から年齢別に紹介。0・1・2歳児の年齢別「遊び歌のポイント」のほか、子どもをひきこむ導入のヒントや発展のヒントなども多数掲載しています。一対一から集団まで、さまざまな遊び方にも対応。

乳幼児といっしょにうたったり踊ったりして、スキンシップを楽しむためのアイデア満載の一冊です。



鈴木みゆき 編著 AB判 96頁 本文2色刷り 定価：本体2,200円+税

【既刊】好評発売中！

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ1

笑顔がいっぱい わくわく保育室

阿部 恵編著

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ2

げんきわくわく 手づくりおもちゃ・プレゼント

阿部 恵編著

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ4

心を伝える おたよりアイデア 鈴木みゆき・原田留美編著

キンダーブックの

フレール館

最新刊

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ



行事別保育のアイデアシリーズ 1 idea series 元気がいっぱい 夏期保育

夏は、子どもたちにとって魅力いっぱいの季節。保育者のかかり方一つで、夏の魅力がどんどんふくらんで、子どもたちの育ちがもっともっと豊かなものになります。本書は、保育者の発想を広げ、豊かな「夏期保育」を展開していくための「遊びのレシピ集」です。

AB判 96頁

やまもとかつひこ 監修/関西あそび工房 著 定価：本体2,200円+税



行事別保育のアイデアシリーズ 2 idea series みんなにこにこ 運動会

「ふだんの子どもの遊びを運動会種目につなげたい」「見ている人も楽しめるものにしたい」「いつもの種目をもっともおもしろくするためには」など、保育者と子どもたちの工夫が生かされた運動会の新しいアイデアを多数提供。子どもも保護者もうれしい、新しい運動会のヒント集です。

AB判 96頁

ワークショップりんごの木 著 定価：本体2,200円+税



行事別保育のアイデアシリーズ 3 idea series 心を伝える 入園式・卒園式

どんな入園式・卒園式が、子どもたちや保護者にとって魅力的なのでしょうか。本書は、さまざまな保育の場で行われている「入園式」「卒園式」にスポットをあてて紹介。独自の「入園式」「卒園式」を工夫するためのヒントとなります。

AB判 96頁

小林紀子 編著 定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレール館

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆